

# トッド・ラングレン氏の初めての卒業式スピーチ

トッド・ラングレン氏：許可を得たので、帽子を外します。よかったです。サングラスなんです、みなさんが聞いている間、もし何も見えなければその分いい感じに話せると思いますので、よろしくお願いします。

卒業生のみなさんにお祝いの言葉を言わせてください。私は、この日がみなさんとご家族において、もっとも大切に記念すべき日だとわかっています。そしてこのセレモニーのために参加しているみなさんに、特別な感謝を言わせてください。あなた方は、バークリー音楽院の評価をただ切に高めてきました。私は、みなさんが自分自身を誇りに思うべきだということと同様に、この学校があなた方を誇りに思うことを確信しています。

私は公の場でスピーチすることには慣れていますが、実際に何度もしてきました。しかし、卒業の場でのスピーチは初めてで、おそらくみなさん、私が何をすべきかという可能性の全てをすでに知っているため、まるでその結果は満場一致の喜び、あるいは集団自決になってしまうのかと、私が何か悪いことをやらかすだろうと心配したかもしれません。もし私がきちんとしなかったらね。

しかし、何がもっとも私を混乱させたかということ、私が今ここに立っていること、そして学術の分野においてとてつもなく素晴らしい経歴を与えられるという栄光を受け取っていることです。

私は、ルシンダと同じように、なんとか高校を卒業しました。大学には進学しませんでした。私はバークリー音楽学校レベルのテスト

に合格しなかったでしょう。決してオーディションに合格しなかったでしょう。そして、今日になっても、どうやって音楽を読むのかわかりません。

(会場歓声)

いいですね。明らかに、あなた方は理論の授業が嫌いでしょう。この事実が重なって、私は、個人的に今まで一度も1位のシングルやアルバムがありません。グラミー賞にノミネートされたことも、ありがたいことにロックの殿堂にノミネートされたこともありません。

もしノミネートされていたら、私は走り続けてこなかったでしょう。もし選出されていたら、私はミュージシャンとしてここまで来れなかったでしょう。

したがって、私がみなさんに与えることができるのは、私のストーリー、そしてみなさんにその結末を描かせることだという結論に至りました。

## 自分自身を路上で見出した

私が大人になった時知ったことの1つは、私はミュージシャンだということです。そして不幸なことに、私が育った環境にいた全員にとってそれは重要なことではありませんでした。

私は最低な学生でした。私は学校で興味があることだけをしたかったのですが、すぐに興味を失いました。なんとか高校を卒業するまで続いた、俗にいう学生生活において、私は壊滅的でした。

私は、自分自身を路上で見出しました。その時点で2つ可能なことがありました。1つは、がんばって仕事をみつけ、お金を集めてエンジニア学校へ行き、コンピュータープログラムを学ぶことです。なぜならそれは私の興味外のことだったからです。

もう1つは、ミュージシャンとして賭けてみることに。つまり、何週間か道で過ごし、幸運だったらフィラデルフィアでバンドを組む道を見つけるということでした。まあ、そのバンドをあなた方は知らないでしょうね。しかし、私がギタリストだった時、私はギターに虜でした。言葉の通り、虜でした。これが私の人生で大切になった唯一のものでした。

今やっている作曲のことは考えませんでした。前の方に立って歌うなんていう才能があるとも感じませんでした。ギターが私にとってもぴったりで、周囲の人々を感動させるのに十分なテクニックを磨くことはできました。そして実際、地元のブルースバンドで仕事を得ることができたのです。

このバンドは長くは続きませんでした。なぜなら、音楽業界で大変動があり、私のバンドの全員がブラックミュージックを演奏する白人集団のポール・バターフィールドというバンドのコピーをしていました。そして、彼らがグレイトフル・デッドというバンドを発見するとすぐに、考え込んでしまいました。私は、それに我慢ならず、後に18ヶ月続くNazzyというバンドを作りました。そして、再び、路上で私自身を見つけたのです。

このことは、Nazzyが発見されたということ以上にこの後の人生を決める出来事だったと思います。なぜなら、これは二度と再現でき

ない偶然であり、その時までには路上で私の道を見つけたからなのです。

おそらく、私はギターを持っていませんでした。私はまだミュージシャンでしたが、演奏する楽器を持っていなかった。そして、得ることができた仕事をに就きました。ディスコのデザインングライトの紐を巻き上げ、ウェストヴィレッジで洋服屋と一緒に生活しました。ちなみに、このことは私のセンスに影響を与えました。

しかし、仕事で良い功績を残すことができ、そしてアルベルト・クロスマン・オーガニゼーションに入ることができて、私は幸運でした。オーガニゼーションは、世界でこの上なくすばらしく、信頼できるものでした。アルベルト・グロスマンは、世界での最上級のマネージャーです。そして彼らはその時レコードビジネスを始めようとしていたところで、私に参加して60年代にさらに新しくなった多くのフォーク歌手とコンタクトをとるよう促したのです。

それがその時に起こったことすべてです。

## そして突破口が訪れる

そして私は、イアン&シルヴィア、ジェイムス・コットンといった伝説的にすばらしいアーティストや歌手と同様に、新しいアーティストたちとも仕事を共にしました。

私の大きな突破口は、私がザ・バンドの、3枚目のアルバムだったと思いますが、ステージフライトの作成に携わっていた時です。そこから、私はとても成功したプロデューサーとなりました。

その時、自分のプロジェクトのためにレコードを作ることに突然興味が湧きました。パフォーマーになりたいという気持ちはありませんでした。私はただ、自分のレコードを作る権利があると感じたのです。

私はまだ曲を書いていたし、実際それについて学んでもいました。私には少しヒットした、『We Gotta Get You a Woman』というレコードがあります。軍事フェミニストが歌詞を誤解し、駅を爆破すると脅迫されるまで、この曲は実際にボストンのラジオで流されていました。したがって、レコードはチャートを上り、そして下っていきました。

初めは、私はパフォーマーではありませんでした。それがどのようなものか、どう路上で受け入れられるか、どう人々のためにパフォーマンスされるか想像が付きませんでした。そして私が初めてパフォーマンスをした時、声を枯らさず、20分のパフォーマンスをすることができなかつたのです。

それはつまり、どれだけ私がパフォーマーとして遅れているかということでした。しかし、私はそれに耐えました。私は作曲をし続けました。そして最終的に、『Something/Anything』（彼が作詞・作曲・楽器演奏も1人でこなしたアルバム）と呼ばれる、先ほど述べていた、突破口を得ました。

そのようななか、いくつかのヒットシングルがあった間、私にとっての最大のスリルは、メキシコのティファナから放送される50万ワットのラジオ局を持っていたウルフマン・ジャックに会った時でした。彼は放送をLAから行なっていました。彼は私のチャンピオンとなりました。



そして、これはすべてのアメリカのラジオ局にとって違法行為だったのですが、彼はティファナからシカゴへ（音楽を）届けることができたため、私をたくさん助けてくれました。

私にとって、『Something/Anything』は大きなブームでしたが、人々は私を男性版キャロル・キングだというようになりました。私は彼女のファンでしたが、比べられることで、私をイライラさせました。みなさんは誰かと比べられたくないし、誰かだっただけあなた方と比べられたくないんです。

## 音楽においてもっとも大切なのは、自分自身を知ること

そして次の『A Wizard, a True Star』というレコードで、180度の方向転換をしました。『Something/Anything』の成功は続かなかったという批判をされ、レコード会社にも批判されました。

しかし、ここで2つ、心に留めてほしいことがあります。私は成功したレコードプロデューサーだったので、私自身のレコードの成功について無駄な心配をしなくても良かったのです。もう1つは、私は音楽を、以前考えていたよりも、何か異なるもののように見始めました。

私はみんなと同じように作曲していました。私は3枚のアルバムに高校時代にあった失恋の経験を投影しましたが、突然、「こんな女もう気にしない」と思いました。そして、私の経験から頭の中に音楽的にもっと大きなことがあると気づいたのです。

父がロックが嫌いで、家でそれを流すことをしませんでした。私はラヴェル、バーンスタイン、そしてギルバート・アンド・サリバンを聴いていました。みなさんのうちの何人かは、とくに若い時には聴いていなかった分野だと思うのですが、そのすべてが私を捉えました。そしてその時点まで、それに決して気づくことはありませんでした。

これは私の音楽的色付けにおいて、非常に重要な部分でした。私は本心を偽って曲を書いていました。ですから、私はクレイジーな『A Wizard, a True Star』というレコードを作ったのです。

その時に、今までレコードを作成してきたすべてのルールを投げ捨てました。そしてできる限り「みんなの利益のためにお金を稼ごう」という考えは排除して、私の頭の中にある混沌をレコードに刻み込もうと決めました。その結果は、私が先に述べた通り散々で、観客は半分に減ってしまいました。

しかし、トレント・レズナーが、このレコードが他のアーティストたちに大きな影響を与えたとコメントしたのです。ですから、私はこの無茶苦茶な試みに対して特別な誇りを持っています。商業的な成功を収めた後に、これが私の人生の手本になりました。

皮肉なことは、高校で私はまったく学んでいなかったことです。しかし、高校を出た時に、学ぶことを学びました。そしてそれ以来、私の目の前にある興味のあるものは、できるだけすべて吸収してきました。

したがって、私はどのように音楽表現の幅を広げていくかだけでなく、コンピュータープログラム、映像制作など、もし卒業の時点で

考えることをやめなければみなさんが簡単に学べるようなさまざまなことを学びました。

今日何かが終わるように思えますが、これは何かの始まりの日にすぎません。偉業や成功と同様に、この式典に関して喪失感があると思います。人生で二度と会うことはないかもしれない友人たちに、別れを告げる場であるかもしれないのです。

しかし、音楽の世界で活かせるもっとも重要なことは、自分自身を知ることです。やっと、私は音楽が私に示してきた意味がわかったのです。何においても、自身の探求が一番なのです。自分のアイデアに対する客観的な目を持ち、耳を傾け、自分がホラ吹きかどうか気づくのです。自分が正しい方向にいるかどうかを探るのです。

私はここにいるみなさんを、この尊敬のなかで勇敢になるよう、この尊敬のなかで恐れを抱かぬよう応援します。私は批判によって声を荒げる能力を失いました。

今日あなたがすることが、実際にどう影響するのか、どのように未来に影響するかは決してわかりません。あの時、みんなにとって強い嫌悪だった『A Wizard, a True Star』というアルバムは、今、私のキャリアにおいてもっとも重要な瞬間だったのです。

そして私はみなさんが自由を感じ、ある時が来たら負うかもしれない恐怖を感じないことを祈ります。なぜなら、それが自身の決定的な大切な瞬間なのだとわかるかもしれないからです。もう一度、お祝いの言葉を言いたいと思います。おめでとうございます！